

# まちDIALOG

ダイアログ



## 那覇のまちにアートが飛び出す



About NAHA  
アートがひらく那覇の可能性

Artist dialog  
アーティストとまちの対話をカタチに

Special guest  
海外、県外から参加のアーティスト達

ART INITIATIVE OKINAWA  
那覇文化芸術劇場なはーと  
NAHA CULTURAL ARTS THEATER NAHA

# ART NAHA

## まちなかの展覧会

詳細はART NAHAのウェブサイト、または、インフォメーションセンターでご確認ください

- オープニング **12月3日(土) 16:00~** 牧志公園
- クロージング **12月18日(日) 16:00~** 牧志公園
- 展覧会期間 **12月3日(土)~18日(日)**  
※会場によって開催日や時間帯は異なります
- 開催場所 **那覇市内各地**  
那覇文化芸術劇場なはーと展示室、  
ジュンク堂書店、第一牧志公設市場、水上店舗、  
ブンガボンガ、浮島ブルーイング他

### 展覧会の楽しみ方

まちなかで開催する「ART NAHA」では、情報を集約したインフォメーションセンターという入り口を設けています。まずはそこで、展覧会の詳細と地図をもらい作品を見て回ってください。作品の見方にルールはありませんし、知識がなくても楽しめます。自分の感覚を信じて、作品に向き合ってくださいね。

作品を巡る際は、時間に余裕を持って那覇のまちを歩いてください。時には道に迷って、偶然の出会いや発見を喜び、歩いて得た経験を大切にしてほしいと思います。

まちなかでは、制作過程やその背景など、美術館とは異なる、より幅広いストーリーを感じられます。

アーティストや運営チームは、参加者の皆さんからの感想をお待ちしていますので、鑑賞後にもインフォメーションセンターに立ち寄り、ぜひ自由な声を聞かせてください。

### 展覧会プログラム

- **Cross Over 企画展**  
地域のリサーチをもとに制作したアーティストの作品を発表  
翁長 巳酉、津波 博美、児玉 美咲、上野 雄次、古謝 麻耶子、  
犬塚 拓一郎、野村 恵子、眞鍋 アンナ、ユニ・ホン・シャープ
- **In-between Islands 香港沖繩交流展**  
香港のアーティストによる映像作品展とシンポジウム  
タン・クオック・ヒン、ナタリー・ロー・ライライ、マップ・オーシャン、  
リ・ニン、サイラス・フォン
- **Cross Border プロジェクト**  
沖縄から世界とつながり、対話することをテーマに、写真や上映、  
インスタレーションなどを通して参加者と対話する  
アレクサンドラ・ノヴィツシュ、グレッグ・ジラード、  
リンダ・ハーヴェンシュタイン、ノ・ヨンソン、山里 孫存、大重 潤一郎
- **末吉公園アートチャレンジ**  
末吉公園の自然を感じながら、  
参加者が制作した作品をなはーとで展示する  
soremomatayoshi、又吉 啓

### 会期中の主なイベント

- 12月4日(日) 11:00~緑ヶ丘公園  
上野雄次 花いけワークショップ
  - 12月4日(日) 17:30~ジュンク堂書店B1  
香港沖繩交流展シンポジウム
  - 12月7日(水) 19:00~  
トーク 2022年の国際展を振り返る  
〜ドクメンタ、ヴェネチア・ビエンナーレほか(詳細はウェブサイトをご確認ください)~
  - 12月11日(日) 15:30~牧志公園  
パブリックスペースの在り方を考える座談会
- ※その他、アーティストトークやまち歩きなど開催予定!

- 場づくり/CAMP-O 協同組合 宮平 未来 久高 友嗣 伊佐 直哉
- 撮影/大湾 朝太郎 ● イラストデザイン/soremomatayoshi ● イラストマップ/平良 亜弥
- 校正/高橋 優子 ● 編集デザイン/studio BAHCO
- 後援/琉球新報社 沖縄タイムス社 琉球放送 琉球朝日放送 沖縄テレビ放送 エフエム沖縄 エフエム那覇 ラジオ沖縄  
一般財団法人沖縄観光コンベンションビューロー 一般社団法人那覇市観光協会
- 主催/那覇市 ● 助成/香港アーツ・ディベロップメント・カウンシル 香港藝術發展局  
Hong Kong Arts Development Council
- 企画・制作/AIO×那覇文化芸術劇場なはーと  
ティトゥス・スプリー 内間 直子 上地 里佳 島袋 景子 知念 尚子 仲村 祥平 長谷川 仁美/林 立騎 仲嶺 絵里奈

インフォメーションセンター  
**RENEMIA**  
那覇市牧志2-7-15 12:00~18:00  
牧志駅徒歩1分

お問い合わせ先  
**ART NAHA事務局**  
080-3957-1656





現代アートを通して、国際交流や人材育成などを担うAIO(アート・イニシアチブ・オキナワ)と、那覇文化芸術劇場なはーとの事業として、12月3日～18日まで那覇市内各地で、企画展や公募展を含む、国際交流展「ART NAHA～まちなかの展覧会」を開催する。本紙では、展覧会の楽しみ方や詳細、アーティストの創作プロセス、世界のアート事情などを紹介する。

## まちにアート アートにまち

ティトゥス・スプリー AIO代表

### 対話が新しい気づきと刺激を生む

日本では、2000年代からまちづくりの一環として、まちを活性化するためにアートフェスティバルがたびたび開催されている。アートによってまちを豊かにする試みは同じでも、12月3日から開催する「ART NAHA」には少し違う意味合いがある。

まちなかでアートを制作し発表する経験は、まちに刺激を与え、同時にアートにも地域社会の影響を与える。この機会がまちとアートの対話になり、人々とアーティストの新しい気づきになれば幸いである。

### アートによってまちを豊かにする試みとは

実は、アートとまちの関係はかなり古い。特に密集した都会では、昔から表現の豊かな人達が集まって、様々な美術的な発展があった。1万年前に全盛を迎えた世界最古の都市遺跡と称されるチャラル・ヒュクク

(現在のトルコ)文明では、まちの至るところにアートギャラリーのように作品が並んだ。古代ギリシャのアテネでは、生活の中心になっていたアゴラ(広場)の周りに、演劇や美術など、様々な表現活動があった。またヨーロッパのルネサンス時代、フィレンツェなどの都市では、現代においても心動かされるたくさんの傑作が生まれた。19世紀の終わり頃のパリはモンパルナスが社会の中心で、アーティスト達が都会生活から多様なたくさんの刺激を受け、印象派、表現主義、シュールレアリスムなどの20世紀を代表とする近代美術をつくり上げた。

現在のような、美術館やアートギャラリーなど美術のための特殊な枠ができる以前は、都会の地域社会には、表現があふれていたが、20世紀になって、日常生活から遠ざかって、アートがどどん箱の中に閉じ込められるようになり、特殊な場所で特定の人が鑑賞する美術になってしまった。社会の常識にチャレンジする現代アートには、特別な枠があった方がよいこともあるが、21世紀のアートは人々の日常に戻るべきではないか？



太平通りの2階、独特の雰囲気を感じる知る人ぞ知るアートギャラリーは、ティトゥスのお気に入り。海外からのゲストを案内することも多い。那覇のまちでは、いろいろな場所でアートと出会う

### かつての那覇はアートのまちだった

戦後まで、那覇(当時はまだ首里だった)には、ニシムイ美術村に代表されるように、地域社会の中に確かにアーティストの存在があった。

'90年代後半からの急激な開発や社会のシステム化によって、アートは身近な環境から消えてしまった。経済優先の開発により魅力的なまち角はどんどん失われてきてい

るが、探せばまだまだ面白い隙間や歴史が垣間見れる個人的なロケーションがたくさんある。「ART NAHA」では、アーティストの目線でまちを発見し、様々な対話をもとに制作、発表する。アートな見方(視点)がまちに登場すれば、みんなの心にももっと余裕が生まれるのではないかと

消費者社会で、受け身体制になっている現代において、創作する環境や姿勢はとても重要になるのではないかと。経済のアップダウンに負けないのは人間の創造力!

ティトゥス・スプリー
琉球大学教育学部美術教育准教授・建築家・アーティスト・キュレーター・教育者。ミラノのドムスアカデミーデザイン科卒業後、ベルリン芸術大学にて建築の修士課程を終了。1996年から東京大学に留学し、東京・向島エリアの研究とまち再生活動を行う。2001年から琉球大学に在職し、沖縄を拠点に幅広く国際的な活動を展開。旧前島アートセンター副理事

## Round Table 【座談会】 まちとアートの可能性 「これまで」と 「これから」

様々な立場から、アートについて語ってもらった。

### 皆さんのこれまでの活動を教えてください。

ティトゥス・スプリー(以下T) 宮城潤さんとの出会いをきっかけに、前島アートセンター(以下MAC)に理事として参加しました。戦後の人々の創造力がカタチになった農連市場などに夢中になり、アートイベントワンキョのwanakioを企画しました。

宮城潤(以下宮城) 自分も表現者として活動していた2000年頃は、県立美術館の建設が大幅に遅れており、県内のアートシーンは活気を失っていました。美術館設立準備室の学芸員達もノウハウを生かせる場所がない状況で、のちにMACが入るビルのオーナーと出会い、MACの構想が生まれました。前島は戦後にできた歓楽街でしたが、当時はすっかり廃れていました。正直、強い信念を持ってスタートしたわけではなく、現状の不足からインパクトがほしくて始めたので、まさかその後10年にわたって続くとは思っていませんでした。

平良亜弥(以下平良) 琉球大学教育学部の美術教育専修在学中に、ボランティアなどでMACの活動に参加していました。どういう仕組みで成り立っているのか興味があり、卒業後、事務局に入りました。自分も制作活動をしながら、運営についてなど右も左もわからないまま、アートと教育をつなぐような役割も担っていました。2011年のMAC解散後は、大きなムーブメントというよりは、個々の活動が小さな波となり、途絶えることなく継続していることは、何かいいなと思います。

soremomatayoshi(以下so) 子どもの頃から絵を描いていて、バンクシーやグラフィティが好きでした。大学時代はいろいろなお店でドローイングやステンシルの展示があり、那覇の古着兼ギャラリーやコザの「ストックルームギャラリー」で展示を見て回っていました。アメリカに半年間留学して、自由に描く人や作品に触れて、自分でも壁に絵を描きたくなりました。ストリートの世界はつながっていて、那覇の壁に描かれた作品を見ると、日本各地から誰が来たのかわかるんですよ。

又吉啓(以下又吉) 僕は東京出身ですが、大学生の時に波家(シブハウス)をきっかけにシェアハウスのムーブメントが起きて、波家に入り浸っていました。それから沖

【参加者】

- ティトゥス・スプリー(AIO代表)
- 林 立騎(那覇文化劇場なはーと 企画制作グループ長)
- 翁長 巴西(アーティスト・ブンガボンガ店主)
- soremomatayoshi(アーティスト)
- 又吉 啓(アーティスト)
- 平良 亜弥(アーティスト・元前島アートセンター事務局)
- 宮城 潤(若狭公民館 館長・元前島アートセンター理事長)
- 上地 里佳(ART NAHA 公募プログラムコーディネーター)

● 権 聖美(聞き手・文)

繩にナハウスができて、全国的に広がったシェアハウスのネットワークのおかげで、どこに行っても宿泊先に苦勞はなかったです。T シェアハウスは、まちとアートとコミュニティづくりが融合した、とても興味深い取り組みですね。林立騎(以下林) 東京の大学に在学中、ドイツに留学し、帰国後はパフォーマンス・アーツの方達との出会いをきっかけに、ドイツ語の演劇のテキストを日本語に訳した活動していた2000年頃は、県立美術館の建設が大幅に遅れており、県内のアートシーンは活気を失っていました。美術館設立準備室の学芸員達もノウハウを生かせる場所がない状況で、のちにMACが入るビルのオーナーと出会い、MACの構想が生まれました。前島は戦後にできた歓楽街でしたが、当時はすっかり廃れていました。正直、強い信念を持ってスタートしたわけではなく、現状の不足からインパクトがほしくて始めたので、まさかその後10年にわたって続くとは思っていませんでした。

### それぞれが考えるアートイベントとは？

翁長巴西(以下翁長) 見る側は非日常、それだけ なんじゃこりや、あー面白かった!子どもの頃に受けた刺激を大人になってもう一度体験できる。現代アートでも古典の絵画でも、美術の知識はなくても、現場で見れば何かを感じる。ただそれだけでいいと思う。アートっていうと敷居が高いイメージだし、漢字で書くと芸術、硬い。そうだけど、そうじゃない! アートに意味を求めるとか、色だとか、変わったカタチだとか、素直な心の声が届く社会になればいいな。so 参加者もお客さんも普段行かないところにわざわざ足を運ぶのが楽しいと思う。私は、なはーとができてからよく周辺をブラブラして、知らなかったレコード店を見つけたし。イベントをきっかけに、新しいことを見つけたのは誰にとってもいいことだと思います。

### 自由に表現ができる社会とは？

上地里佳(以下上地) 伝統芸能でも美術でも、企画や補助金などの申請を作家や実演家自身でマネジメントしている方が多いことに驚きました。ですが日中は別の仕事をしたり、事務手続きに追われてしまって、企画に専念しづらいといった環境もあります。とはいえ、誰か他の人を雇用する資金を捻出するのはなかなか難しい。そういった現

状を踏まえて、いろいろな側面から文化芸術を支援できる制度があれば、活動の幅は広がるのかなと思います。

翁長 私も何でも自分でやってきました。音楽では、とにかく面白いことをしたいっていう、インディーズのムーブメントが'80年代にあって。当時は、大学祭でも音楽の人、アートの人とスタッフとの境目もなくて、変なパワーがあった。私のようなおばちゃんは今も全力で楽しいことをやってる!こり、つくる側の仕事を始めました。'90年代からポストドラマ演劇という流れが生まれ、まちで体験する演劇が登壇し、私も2006年ぐらいから、国内、台湾、ドイツ、ギリシャ、コロンビアなど各地をリサーチして、まちの人と一緒にその土地でできない演劇的な経験を作品にしてきました。

T 例えば、西洋では強いアートマーケットがあるので特定の人は食べていけますが、マーケットがアートを支配したらだめだと思います。アートはお金を稼ぐことだけが大事ではない。売るためにつくっていたら心が疲れていくんですね。沖縄だけでなく日本では働きなからアート活動をしている現状があります。

林 いろいろなモデルがあると思いますが、大事だと思うのは、依存しないこと。アートマーケットだけに依存すると、売れるものをつくらないといけない。自分のつくりたいものだけをつくってはいけません。また、国や県の助成金に依存すると、自分のやりたいことを変えることになる。どこにも依存しないで、かつ生き延びるためには、マーケットも使ったらい、取れる助成金は取ればいい、自分でお店をつくれるならつくればいい、どうすれば自分の自由を確保できるか、という選択肢を意識して、自覚して、うまく組み合わせ、経済的な活動=生活していくのがいい気がします。

T アートの自由のためには、時に社会の支援も必要だと思いますが、それを得るためにはどうすればいいのか? アーティストやキュレーターへの課題だと思います。宮城 MACは、僕とビルのオーナー、学芸員、その関係者でなんとなくスタートしたけど、設立の背景から公益性についてはよく考えていて、荷が重かったこともありました。アーティストをサポートしたいというよりも、そのための何か仕組みはつくりたいと意識していました。場を提供して、海外や県外のキュレーターを紹介することはできたけど、アーティストが稼げるような基盤を作るサポートができたかどうかはわかりません。チャンスをキャッチして、それをつなげたアーティストはいるので、チャンスを提供できたとは



2022年3月に牧志公園で開催したまちなかアート「クロスオーバー」の様子

思うけど、生かされた人と生かせなかった人、アーティストによって差があった気もします。

### 活動を持続させるためには？

平良 表現に対する柔軟な仕組み・社会的な制度があるといいなと思います。表現が生まれる現場というのは、すぐワクワクするもの。もっといろいろな方が、日常的に表現に至るまでの過程を楽しめる機会が増えるといいですね。うまく言えないけど、団地のひと部屋にアトリエがあるとかが、玄関先で制作しているも違和感のない気持ちになれる、そんな環境がつけると社会として楽しそう。

又吉 普段一人で仕事をしていると自分がどうやって生き残っていくのか悩んでしまう時がありますが、今回のようにアートに関わる様々な立場の人と、将来的なビジョンを共有できる機会に、とても活力を感じています。自分のことだけでなく、社会の未来に向けて活動できるのはとても楽しい。特に、多世代で集まることが大切だと思っています。上地 2週間ちょっとの会期ではありますが、終了後も作品を観た方の心に残る経験や、それまで違った関係性をつくる機会になったらいいと思います。作品や表現に触れることで多様な考えや視点と出会う。そういう場をどう立ち上げるのかということ、公募で出会ったアーティストの方々と考えていきたいです。

林 これは自分の課題でもあるんですが、作品だけではなくて、ツアーやプロセスを含めた経験などを大事にしたアートプロジェクトなり、企画としての時に、質・クオリティをどうやって判断するのか。評価基準、指標を考える必要がある。それは私の仕事でもあるし、関わっている人自身が考えていくしかない気がします。宮城さんは「チャンスを生かした人は、もともと力がある人だ」と言われていたけれど、でもチャンスの場であったことは確か。「ART NAHA」やAIOの活動から、新しいアーティストが目玉を浴び、県内だけじゃなく、広がりを持って活動できることを楽しみにしています。

T 「ART NAHA」を打ち上げ花火にしないように、つくる側はきちんと評価を出したいですね。皆さんとたくさん対話をして、終わる頃には相乗効果でよりパワーを生み出せたらうれしいです。





## 制作のプロセスから作品を想像する

Cross Over 企画展に参加するアーティスト達の制作プロセスや展覧会に向けての思いなどを聞いてみた。取材は10月末に行っている。実際の企画展ではそのプロセスがどのように進化、変化しているのかもぜひチェックして。

### 無駄のない美しい手さばきを球体でどーんと表現したい

アーティスト① 翁長 巳酉



「直径2mのボールに、市場で働く人の手を投影したいんだ!」、面白い遊びを見つけた少年のように、キラキラした瞳で教えてくれた翁長巳酉さんは、復帰前の那覇の牧志で生まれ育ち、亀甲墓が立ち並ぶ鬱蒼とした牧志公園を遊び場に、テレビやラジオの米軍放送から流れるアメリカンコメディやジャズ、ソウルミュージックに慣れ親しんだ。本が大好きで好奇心旺盛、いつも違う角度から物事を見てみたいという気持ちが強かった。ラテン音楽をもっと追求したいと、30代で本場のブラジルへ渡った。

ブラジルや東京で暮らしつつ、沖縄へ戻るたび、写真展にはよく足を運んだ。復帰前後の建築や活気のある各地の市場、沖縄市や名護の風情が残るまちなみ、米軍基地のある風景…。政治的な発言はなくと

も熱いメッセージが込められた数多くの写真とも出会い、記録の大切さやアートだからできるアプローチを再認識する。今回テーマに選んだ「市場で働く人の手」は、ずっと温めていた企画。「ものをつくる手には無駄がないんです。指一本一本が道具なので、マシンのように効率がいい。指の骨や筋肉の形態は変えられないけど、最大限効率のいい動きは本当に美しい。肉をさばいたり、もやしのヒゲを取ったり、スニーカー(メンマ)山脈をつくら。詳細は内緒ね」

映像は意外性のある方法で表現したい、と考えたのが、球体スクリーンだ。「実際はどう見えるのですか?」と問うと、「ふっ、にゅーんて、笑っちゃうよ」ほくそ笑む翁長さん。会場は第一牧志公設市場のどこか。

### 三重城に見る琉球交易の記憶と水上店舗の建築に揺れています

アーティスト② 津波 博美

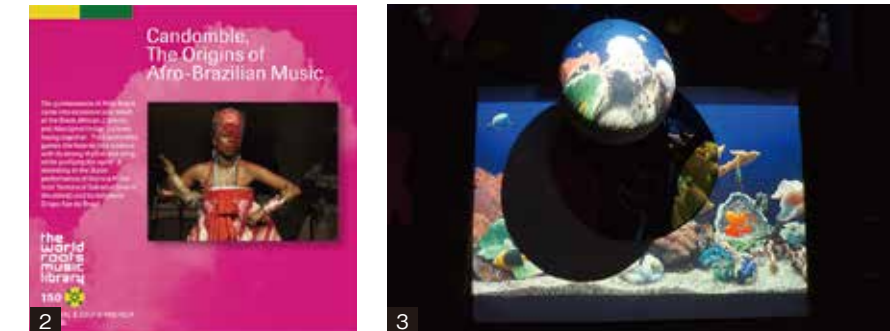


1996年に渡英し、ロンドンを拠点に世界各国を旅して様々な土地の声をインストールして表現してきた津波さんは、会場決めで心が揺れている。今年、那覇をリサーチし、心に残った場所が三重城だった。「かつての那覇は浮島で、海外の交易船が入港し、賑わいました。三重城は倭寇(海賊)の襲来を防ぐ目的で築かれ、船の行き来を監視する役目を担っていました。同時にここは、人々の拝所でもあります。南米など遠くの国へ移民した大切な人を思い、手を合わせた場所であり、離島に祀る先祖を選択する場所。リサーチを始めた頃に、ウクライナへの空爆が始まり、戦時中は、三重城にもたくさんの爆弾が降ったと聞き、海の向こうの惨状を思い胸が痛みました」

津波さんは「ちょっと試してみたいことが

ある」と、国旗に見立てたイギリス製のチョコレートや健康食品の企業のロゴ、赤でイメージした琉球をそっと草陰に忍ばせた。もう1か所、津波さんの心を悩ませているのが、戦後、那覇の中心を流れるガープ川の上に立てられた水上店舗だ。狭くなったり広くなったり、川の幅と川筋に忠実な緩やかなカーブのある建築、屋上に残る放置されたままの朽ち果てたアンテナや錆びた鉄骨、その背後にそびえる高層ビル群、階下に広がる昔ながらのトタン屋根の集落。そのギャップがなんとも那覇らしい。「教えてもらうまで、こんな場所があることを知りませんでした。ここで何かを表現することよりも、多くの人に水上店舗を知ってほしいです」

最終的にどちらを選ぶのか、楽しみだ。



1: 直径2mのビニールボールを搬入中 2: 舞台の上をユーカーやハイビスカス、月桂樹の葉で埋め尽くしたアリオ音楽財団の「東京の夏」のCDジャケット 3: 球体をスクリーンにするとこんなイメージになる



1: 交易をイメージして、三重城の草原に3本の旗を立てた 2: 港から海の向こうを思う 3: 建設中の水上店舗(沖縄県公文書館所蔵) 4: 水上店舗の屋上で見つけた古い器具と対話しているよう

**つは ひろみ**  
南城市生まれ。2006年ロンドン芸術大学プリントメイキング科進学、2007年同大学院修了。モンゴルやタイでの滞在制作では、現地の生活空間を写真やインスタレーションで表現。現在は保育園でアートクラスを担当。創造力を育みながら世界とつながる喜びを伝えることに力を注ぐ

## アートとまちの結節点をつくる先に

上地 里佳 公募プログラムコーディネーター

芸術や美術、アートという言葉に耳をすれば、美術館や劇場といった専門の文化施設で鑑賞するものというイメージを持つ方が多いかもしれません。今回開催する「ART NAHA」は、整えられた静かな空間ではなく、那覇市内の公園やカフェ、路上など、様々な人が暮らし、行き交うまちなかで展開されていきます。

まちなか、いわゆる「公(おおやけ)」の空間において表現を試みようとする中で、何をひらこうとしているのか。公といういわゆる「行政」の領域のもので、「私」的な空間

がその対比関係にあるものと捉えられがちです。しかし「公=みんなのもの・場所」として捉えてみると、公とは、一人ひとりの私が重なり合い、立ち上がっていくものとして考えることができるのではないのでしょうか。

今回の「ART NAHA」は、まちなかでアートや表現を試みることによって、多様な私が出会い、対話をするを通して「私達」の関係性をつくり、公を立ち上げていくとすると一手なのだと思います。

アーティスト達によるリサーチや試行から生まれた表現は、私達の生きる社会の多

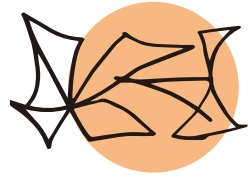
様さ、複雑さを提示し、大げさに聞こえるかもしれませんが、それまでの固定観念を揺さぶる力を持っていると思います。「こんな考えや見方があるのか!」と異なる価値観との出会いを楽しんでみたい、「なぜここで展示するんだろう?」と場所とのつながりを考えた、そこでの経験を他者と共有するために言葉にしてみたり、そんな時間を過ごしてみてください。これまでなかった視座を獲得すること、まちとの関係性に変化が生まれること、それこそがアートとまちの結節点の先にある面白さなのだから。





野外のワークショップで  
創造スイッチをオン!

soremomatayoshi / 又吉 啓



二人がナビゲーターを務める「末吉公園アートチャレンジワークショップ」では、参加者と末吉公園を歩き、制作した作品をなは一で展示する。

「僕は県外でわりとかつちりした現代アートを経て、沖縄に来たんですが、末吉公園のおおらかに圧倒されました。自分にとってここは絵の師匠です。3、4時間いると、同じ景色でも色が変わり、そこからの気づきがあります。アートは結果としての作品を重要視されがちですが、プロセスも芸術っていう感覚を誰かと共有したいと思っています。僕達の役割は、参加者の緊張をほぐして創造のスイッチを押し、自分の感覚を聞くお手伝いすることです。何かを教えるのではなく、自分が楽しんで作る姿を子ども達に見てもらいたいですね」と啓さん。一方、屋外の壁やストリートに

描く機会も多いsoremomatayoshiさん。市場本通りにあったパラソル通りのテーブルや椅子に描かれたポップなイラストが記憶に新しい。二人はそれぞれ作家として活動しつつ、県内の保育園や児童館でアートクラスを受け持っている。soremomatayoshiさんは「楽しいと思っ



1: 紙に影を当て、なぞって描くと太陽の動きが一目瞭然 2: 啓さんと末吉公園を訪れるようになって、soremomatayoshiさんもその偉大さに気がついた 3: 過去のワークショップ参加者のスケッチ

それもまたよし / またよし けい  
見て、触って、感じて、さいなことから新しい発見をする。そんな体験型イベント「Barak Art Book Fair」、「遊びが本になる風景を集めるワークショップ」などを企画している。また、リソグラフィスタジオ「Funky Sea」を運営し、県内外の作家のZINEやポスター制作をサポートしている

あなたが見ていた風景を、  
誰かが見ているかもしれない

児玉 美咲



児玉さんは、会場選びに悩んでいた。ひとつ目はエリアの中心にありながら、誰からも忘れられたように佇む鉄工所。木製のドアが開き、鉄の匂いを嗅いだ瞬間、母方の実家が営んでいた鉄工所の記憶がよみがえった。工場に充滿する鉄を含んだような独特の硬い空気と、響き渡るシャーリングの音と鉄火、戦後、がむしゃらに生き抜いた人の匂いを嗅いだような気がしたという。もうひとつはシェア壺屋。児玉さんが10代の頃、デッサンで通った壺屋は「再開発で新しい道ができてはいるが、建物という箱は残り、中の人が入り替わっている」と児玉さん。屋上からはすっかり様変わりした農

に価値が生まれたり、世代によっても変わりますよね。何に価値を見いだし大切にするかによって、残っていく風景は変わってしまうんです。今ある風景を残すのも那覇だし、変わるのも那覇。今そこに住む人によってかたちづられていく、鉄工所も壺屋の建物も昔から変わらない風景が、過去と今を結び付けてくれているような気がしてなりません」児玉さんは、うるま市の壺屋名で「Studio YAKENA1129」を構え、創作活動を行っている。建物は、アメリカ統治下で栄えた壺屋名大通りにあった映画館を再利用。屋上から見える丘には美しい海を望む「与那城監視哨跡」があり、すぐそばには戦火を逃れた壺屋名クワディーサー(モモタマノ木)が残る。この景色の中に、児玉さんの価値がある気がした。



1: 作成中のドローイング。70年分の鉄の香りが鉄工所の地面と壁に染み込んでいた 2: もとは映画館だった広いアトリエを4人のアーティストとシェア 3: こもりもりとした緑の丘に与那城監視哨跡がある

こだま みさき  
うるま市生まれ。布や繊維素材を用いたインスタレーションやドローイング、平面作品など、場との対話を通して作品化する。「見えないものを可視化するプロジェクト」では、沖縄戦の戦没者数、風、音などを媒体に表現。個展「物語の中の風景2014」では記憶の風景を発表

In-between Islands しまと島、  
香港と沖縄 よく似た二つの島の物語

長谷川 仁美 キュレーター



沖縄と香港はよく似ている。なぜか？ まずは気候、温暖、亜熱帯。次に地形、両方とも島々から成る。そしてこの二つのまちは、地理的にも近い。文化もよく似ている。離島にある墓は、広い面積で囲われていて沖縄の墓に似ているし、冥銭(※1)を燃やす慣習も聞けば同じようなものがあるという。おおらかな人柄や、こだわりはないけれどガッツがあり、反骨精神を備えているところも似ているような気がする。それから歴史。欧米に占領されて本土に返還されたものの、独自の文化を持ち、自由を愛する香港と沖縄の人々は、非植民地化された後も引き続き本国の圧力と政治に振り回され、苦しみ続けている。この展覧会は、香港から5組のアーティストを招待し、彼らの芸術の表現を通して香港の現状や文化、過去と歴史、そして未来を考える展示だ。

空気、歴史、まち、文化との対話。異なる環境で香港の伝統的な村で育ったタンがどのような作品をつくるのか、期待したい。タンは国際的にも活躍している若手のアーティスト。今回は制作と別に、亡くなった自分の祖父の日常を描いた作品も展示する。リ・ニンは、独学でタトゥーを学んで生業にしている。アーティストとしての活動も並行しており、独特の世界観を版画やドローイングでつくり上げる。今回出展するアニメーション作品は、客家(ハッカ)(※2)の言葉を故郷という意味の言葉「ジョンルカ」をテーマに、遺伝子操作により人々の記憶を喚ぶようになったクラゲと、失われた記憶の貯蔵された島の水没の不思議な物語だ。他にも、ヴェネチア・ビエンナーレなどの国際展に出ているマップ・オフィスあためマップ・オーシャン、トラベルジャーナリストをしていたナタリー・ロー・ライライの叙情的な映像、サイラス・フォンの未来の自分の娘の物語などを展示する。二つの島の物語は、観客であるあなたご自身の物語を見つける旅でもある。ぜひとも足を運んでいただきたい。



マップ・オーシャン、25°46'N - 123°31'E、ミックストメディア、2022

タン・クオック・ヒン、Grandpa Tang, ミックストメディア、2017

タン・クオック・ヒン ナタリー・ロー・ライライ リ・ニン サイラス・フォン マップ・オーシャン (ヴァレリー・ボルトフェイクス) はせがわ ひとみ

From HONG KONG

香港在住のキュレーター、リサーチャー。MIACA設立時のディレクター。ウィーン美術アカデミーの博士課程に在学中。これまでの展覧会やスクリーニングは、ソウルの国立現代美術館、ダラス・コンテンポラリー、デュッセルドルフのクンストハレ、ストックホルムの彫刻美術館など多数

(※1) 英語ではヘル・マネーともいう。香港では本物ではないお札を燃やす慣習がある (※2) 戦乱を逃れて中国大陸から移り住んだ人々のこと。よそ者という意味

花いけ宣言

上野 雄次 花道家



実に単純で限りなく美しい 天地森羅万象の理にしたがいつに溢み渡る空のように晴れやかで真っ直ぐな時に暗く淀んだ淵に沈み込む 実に厄介で曖昧な人の心に寄り添い続け その他全てのことから自由であることをここに宣言致します

越後妻有大地の芸術祭の作品。暴走花いけコンマゲ号と雪の重みで根元がわん曲し、後に倒木したものを山から引き出し、豪雪地帯の象徴と見なして暴走花いけ号シリーズに取り付けた

うえの ゆうじ From TOKYO  
京都府生まれ、鹿児島出身。バリ島や火災跡地など野外での創作活動、イベントの美術手がける。2005年より「花いけ」のライブ・パフォーマンスを開始。地脈を読み取り、モノと花材を選び抜き、創造と破壊を繰り返す予測不可能な展開は各分野から熱烈な支持を得ている

沖縄や東京、フランスなど、様々な場所で活動する  
3名の公募アーティストが決定!

「ART NAHA」では、まちで培われてきた文化や営みから試みる表現、地域に暮らす人々と関わりながら作る企画を公募し、プロジェクトをともに展開していく3名のアーティストを決定しました。作品プランをもとに、それぞれが向き合うテーマや関心、問い

参加アーティスト

野村 恵子 (在沖縄) かつての那覇と人、今の風景が混じり合うまちなか写真展

真鍋 アンナ (在東京) 沖縄在住の様々な人々のルーツに触れるまちなか展

ユニ・ホン・シャープ (在パリ&東京) 沖縄とフランスをつなぐことばをめぐる「ビスケット」